

批評の方法⑨

ブラックマーの方法



斎藤 衛 訳
竹内 章

大修館書店

批評の方法 9

ブラックマーの方法

©

M. Saito

A. Takeuchi

1974

1974年5月10日 初版発行

訳者との協定により
検印を廃止する。

訳者 斎藤 衛
竹内 章
発行者 鈴木 敏夫

株式
会社

大修館書店

(101) 東京都千代田区神田錦町3-24

電話 東京 (294) 2221 (大代表)

振替 東京 40504

印刷／壮光舎 製本／大成社

ブラックマーに

ついて

リチャード・パーマー・ブラックマー (Richard Palmer Blackmur, 1904—65) アメリカ、マサチューセッツ州スプリングフィールド出身。学歴はボストンの小学校のみ。一九二七年から三四年まで季刊文芸誌『ハウンド・アンド・ホーン』の編集者として活躍。四〇年からプリンストン大学研究員及び講師。ラトガース大学より名誉博士号を受ける。五六年には来日して長野のセミナーで講義している。

批評集に『二重スパイ』(*The Double Agent*, 1935)、『偉大の代価』(*The Expense of Greatness*, 1940)、『身振りとしての言語』(*Language as Gesture*, 1952)、『獅子と蜂の巣』(*The Lion and the Honeycomb*, 1955)、『現代詩における形式と価値』(*Form and Value in Modern Poetry*, 1957)、『アメリカにおける新批評』(*New Criticism in the United States*, 1959)がある。いずれもあちこちの雑誌に寄稿した論文や講演を集めたもので系統的な著作はない。他に三冊の詩集と、ヘンリー・ジェイムズ自身の小説の序文を編集して、詳細な分析を加えた序論を付す『小説の技巧』(*The Art of the Novel*, 1934)がある。

斎藤 衛
竹内 章

目次

ブラックマーについて	iv
一 ブラックマーの方法	3
二 その特徴	17
三 その系譜	32
四 他の批評家との比較	47
五 その批評美学	61
原注	89
訳注	90
訳者あとがき	93
索引	102

ブ
ラ
ッ
ク
マ
ー
の
方
法

一 ブラックマーの方法

リチャード・P・ブラックマーのように、個々の文学作品に対して、その作品が求めているらしいそれ専用の技巧を用いる傾向があり、しかも、現代の文学批評を代表する殆んどすべての型の批評をいちどは用いたことのある批評家について、ただ一つの操作法を取出し、これを彼の「方法」とする困難は目に見えている。彼にあるのは独自の方法というよりは独自の精神構造、すなわち、現代批評の本質をなす、骨身を惜しまぬ調査の能力であり、これこそ、現代批評家に対する彼の主たる貢献として特別大書して差し支えないものであるかも知れない。『二重スパイ』(The Double Agent)の「ウォーレス・ステイヴンズのいくつかの例」という章で、ブラックマーは、パウンドの詩を読むには「古典と歴史について言及している事柄」を知る必要があり、エリオットを読むには、エリオットが暗に指している「思想、信条、感性の体系」に精通している必要があるとしながら、ウォーレス・ステイヴンズを読むには

「辞書だけあればよい」と言っている。これはブラックマー自身のやり方を語っている。彼は文字通り、パウンドを読むのに歴史を勉強し、エリオットを読むのに神学を研究し、ステイヴンズを読むのに辞書を抱えこむのである。

ブラックマーにとって特に重要なのは単語である。現存する批評家で辞書を呼ぶのに「かの飛躍的自学自習の殿堂」という言い方をするのはブラックマーを措いて他にありそうもない。また同時に、『偉大の代価』(*The Expense of Greatness*)のメルヴィルの章で単語に対して次のような敬意を表する言葉を捧げそうな批評家もあるまい。ブラックマーは書いている。

単語とその互いに親密な排列こそ、文字あるいは音声による芸術にあつてあらゆる効果の、直接的かつ究極的な源であるに違いない。単語は意味を生じさせる。そしてそれ自身連結される際の苦しみが始まる前には、いまにも現実と化しそうな可能性として、意味を包み込んでいたのである。個々の芸術家にとって、単語の使用は発見の冒険にのり出すことである。想像力はそれが操る単語の間を暗中模索しながら自力で発見しようとする。……しかし単語の实在を求めてのり出された冒険には、ある事後的な技巧が伴っているものである。すなわち、われわれにその成功した言いまわしと失敗した言いまわしを区別することができ、暫定的にはあるが、取りおさえられ、試みられた实在の種類と強さを計ることができ、さらに大ざっぱにはあるが、その实在性の出現が必要とした芸術上の約束

と信念の諸条件を推測することさえできる、という意味で事後的なのである。

メルヴィルはそうした吟味をするのにあつらへ向きの例である。われわれは今その輪郭を描いた言語の実在についての概念を、一般に陳述と考えられているものについての概念と結びつけさえすればよい。そうすれば後者の力強さがどこから来ているか分るであろう。またわれわれは言語についての概念を言語の文脈、芸術上の約束という修正力をもつ文脈と結びつけさえすれば、偉大な単語が開示する最高の、そして打ち消し難い実在を直指して行われたメルヴィルの、冒険の成功を理解できるであろうし、少なくとも彼のそうした企てからくる多くの到らざる点、行き過ぎた点を許すことができるであろう。というのはメルヴィルは単語の偉大な使い方をする習慣があつたからである。

このように単語を重視する当然の帰結として、ブラックマーの研究の相当部分は言葉に関するものである。たとえば、彼のカミングズの研究では、カミングズの言語を、「これらの単語の使用が彼に許す意味の特質」への手掛りとして研究する、という意図を標榜した後、彼はくり返し起るカミングズの主要な単語をリストにする仕事にとりかかり、「花」という単語が彼のお気に入りの言葉であることに注目し、「花」という言葉の現れる回数を数え、この言葉の現れる多種多様の文脈を観察し、「花」という語がカミングズの神授の語である、またはあつたということを発見する。この事実とその他の言語分析から、彼はカミングズの詩の本質を定義づけ、論じ、評価するのである。

『二重スパイ』に収められているブラックマのウォレス・ステイヴンズの分析は、この詩人の使う見なれないあるいは「凝^{フレンチャス}つた」単語のいくつかを表にすることから始まっている。

‘rubbed’ (だまされた) 、 ‘girandoles’ (枝付き飾り燭台) 、 ‘curlicues’ (渦巻^{カタル}) 、 ‘catarhs’ (鼻カタル) 、 ‘gobbet’ (塊) 、 ‘diaphanes’ (顕微鏡透かしガラス) 、 ‘clopping’ (パカパカと鳴る) 、 ‘minuscule’ (古写本の小文字) 、 ‘pipping’ (ピョピョ) 、 ‘panicles’ (円錐花) 、 ‘carkeed’ (悩んで) 、 ‘ructive’ (騒々しく) 、 ‘rapey’ (強姦^で) 、 ‘cantilene’ (単純な抒情的旋律) 、 ‘buffo’ (道化役者) 、 ‘fiscs’ (国庫) 、 ‘phylactery’ (聖句箱) 、 ‘princox’ (めかし屋) 、 それに ‘funest’ がそれである。次いで、彼は正面切つて辞書におもむき、これらの単語を調べあげる。 (‘Funest’ という単語は、「悲しいとか、いたましいとか、嘆いたという意味をもち、フランス語の、致命的な、ゆううつな、有害な、を意味する単語に由来しており、死と葬式に關した言葉である」といった具合である。) それから彼は単語を詩の文脈に戻して読み、この詩のすぐれた解釈とステイヴンズの芸術の本質に關する理論の両方のかかえて現われるのである。『二重スパイ』ではまた、ハート・クレインに關しても、死の「熟成したりキュールから解き放されたスフィンクス」 (‘Let sphinxes from the ripe borage’) のなす行為について述べられた挿入的な、難

解な一節を解説するために辞書に助けを求めている。結局納得のいく意味は見つからないのであるが（「しかし、殆んど正反対に近いものが意図されていたかもしれない。あるいは両方の意味であるかもしれない」と彼は悲しげに結論している）、それでも彼はクレインの欠陥のある文構造と際限のない語彙に関する理論をまとめあげている。そしてこの理論は、彼がこの一節を理解できなかったことの、またクレインのより大きな欠陥の説明ともなっているのである。

『偉大の代価』の中でも、ブラックマーは同じような言葉の探求を続けている。エミリ・デ・キンソンについての一章では、彼女の天分は「彼女が用いた単語とそれらをつなぎ合わせるそのやり方」に見い出されるであろうと報告し、ある一節を引用した後、「単語の中にある、陳述から詩を作らせているものはなんであるのか、今仮に追求してみよう」と続け、それから入念な言語分析にとりかかっている。彼は「燐」(phosphor) という言葉の、ディキンソンが使っている回数を数え、その文脈を調べ、彼女の用いる語彙の由来を辿り（騎士道ロマンス、シェイクスピア、スコット、聖書、賛美歌集、等々）、特定の一節に現われた比喻の出所を分析し（裁縫と衣服、法律、宝石、南北戦争、船舶による商取引、地理、超越的神学、

等々)、最後に彼女の愛用語のうち、二つの単語、「絹ビロード」(‘plush’)と「紫」(‘purple’)のさまざまな使い方を追って行く(ついでながら、後者に関しては、彼は珍らしく自らの欠陥を暴露している。というのは彼はどうかやら、ローマ人の使う意味では、「紫」というのは、ロシア人の「赤」と同じように、「高貴な」という意味であることを知らなかったらしいのである)。ついでにもう一つだけ例をあげて論点を強調すると、同書に収められたローラ・ライディングの『詩集』(*Collected Poems*)に対する書評では、彼女がまるで強迫観念にとりつかれたかのように用いる否定語の例をいくつかあげ(「非難を取り下げる」(‘unreproach’)、「やららしていなう」(‘unharshed’)、「優しくなう」(‘unloving’)、「なめらかでなう」(‘unsmooth’)、「愛することを止める」(‘unlove’)、「反死」(‘undeath’)、「反生」(‘unlife’)、「幻惑を解く」(‘undazzle’)、「造られぬ」(‘unmade’)、「考えられたことのなう」(‘unthought’)、「生き直す」(‘unlive’)、「非反抗」(‘unrebellion’)、「美しからぬもの」(‘unbeautiful’)、「非動物学的」(‘unzoological’)、「奇妙でなう」(‘unstrange’)、「荒々しくなう」(‘unwild’)、「貴重でなう」(‘unprecious’)、「雄べなう」(‘unbull’)、「あわただしくなう」(‘unhurriedness’)、「不熱狂」(‘unenthusiasm’)といった否定語が用いられている)。ページによっては十五種に

も及ぶ動詞の否定形が含まれていると述べ、次のように結論しているのである。すなわち、「ライディングは、不^フ、非^フ、ない^{ノット}、かつてない^{ネヴァー}、どこにもない^{ノウエアー}の反^{ノット}・大^{グレート}家である」と。

これらの例から、どんな批評家でも少なくともある程度までは、これと同じ調査をし、辞書で見慣れない単語を調べ、使用の頻度や文脈を調べるなどのことはやるものであって、ブラックマーはただその過程を目に見える形にして、その手続きを隠すよりもむしろそれを彼の批評の組織の中に組み込んだに過ぎない、という反論が主張されるかもしれない。確かにこの反論はわずかながら当たっている。しかし、その適用範囲をブラックマーがなした程度のことに加えて押し広げるとすれば、それは全くあてはまらない。あてはまるとすれば、むしろ批評のために慶賀すべきことである。詩人は真剣な読者（すなわち、批評家）に対しては、知識の点でどんな要求を課しても不当ではない、もし読者に知識がなければ、自ら進んでそれを求め、得た方がよいという前提に立っている点で、ブラックマーは殆んど特異とも言える存在なのである。『二重スパイ』の中では、彼は「外側の作業をいくら積みあげても、明らかにできない」ことがあると言っているが、そうしたものは決して多くはない。そして彼は絶えず「責任」とか「代価」（たとえば、「殉教の代価」、「偉大の代価」というような言葉を用いて、犠牲^{コスト}を払

わねばならないこと、骨身を惜しんではならないことを強調するのである。「批評家の羽毛ぶとん」という皮肉な題名を付けられた一篇では、どのようにしたら作家は「自分自身の仕事に對して最大限の責任のとれる条件を確保できるか」、そのいくつかの方法を示唆し、批評の作業を肉体労働の比喻を用いて定義している（彼が前に書いた小品を「批評家の手間仕事」と呼んだのとちょうど同じ理由からである）。

……作家は自分にできる限りの最も骨の折れる批評行為をなしとげているのであることを熟慮しなければならぬ。彼はいわば絶えず怯えたような状態に身を置き続けようと努めているのである。つまり、まるで今にも何かにとりつかれそうな、まるで自分の洞察力、自分の感性の資源に對して決して慣れることができず、したがって決してそれらに手心を加えることができず、それでいてそのような緊張にありながら、手元にある現実の仕事を判断し、決定し——そして表現し——なければならぬというような状態に身を置き続けようとしているのである。偉大な詩の創作が苛責のない批評の作業であるというのはこの意味においてなのである。そしてそうした詩を十分に味わう作業についてはただその程度が少し軽くてすむだけのことである。また批評の行為が、詩人がやろうと、批評家がやろうと、真剣な読者がやろうと、いわゆる「創造的な」行為であるというのもまたこの意味においてなのである。というのは、その行為がなされる時には、感受性の改造、緊張が見られるからである。批評にかかる経費は、私が以前に使ったことのある語句を借りて、それを限定して用いるなら、偉大

の支払うべき代価である。というのはそれによって獲得されたものは、なされた仕事全体にみまざる確信の感覚にあるからである。

今日では大部分の批評家が、自己の感受性とすでに身につけた学識だけで十分であると考えている。そして彼らは詩を骨折って読むことに吝さかではないが、その詩を読むのに骨を折る以上のことが当然必要であるとは認めない。したがってブラックマーのいわゆる「自学自習」の価値とその特異性を識別する最も良い方法は、知識を必要とする二、三の作品に対する彼の議論と他の批評家のそれとを比較することであろう。言語分析にかけては、もちろん彼にかなう者はいない。たとえば、カミングズについては数え切れないほどの論文が書かれていたが、誰一人として手間ひまをかけて彼の語彙を調べた者はなかった。しかし、それよりも『二重スパイ』に収められた、ブラックマーによるエズラ・パウンドの『三十篇のカントーの草稿』(A Draft of Thirty Cantos)に関する議論と『詩と観念に関する反動的な評論』(Reactionary Essays on Poetry and Ideas)の中に収められたアレン・テイトの議論を比較した方がよいであろう。これらは共に『カントーズ』(Cantos)の書評として、前者は『ハウンド・アンド・ホーン』(Hound & Horn)誌で、後者は『ネイション』(Nation)誌に現われたものである。